John A. Wiseman, *The New Struggle for Democracy in Africa.*

Aldershot : Avebury, 1996, vi＋200 pp.

望月克哉

著者ワイズマンは1990年代に入り，*Democracy in Black Africa* (Paragon House Publishers, 1990) や *Political Leaders in Black Africa* (Edward Elgar Publishing, 1991) という，いずれもサハラ以南のアフリカ諸国を広く扱った著作をものしてきた。本書もこの地域の48カ国を対象とし，実に多くの事例を紹介している。アフリカの民主化闘争そのものは決して新しいテーマではない。本書の特長は，地球規模で生じた新たな政治環境の中で，選挙による政権交代をもたらした大衆による「新たな闘争」をテーマに掲げたところにある。

1989年以来のアフリカの政治システムの性格の変化は，各国の指導者に加えられた広範な圧力によるものとされる。国内外の圧力が組み合わさっているとの見方は，アフリカ政治のウオッチャーの間でも一般的なものである。著者は国内の圧力を重視しており，専門家の多くも同様であるという。民主化への国内的圧力が広範かつ多様である証拠として，教会，労働組合，人権団体や専門家集団，メディア，政治家，さらに大衆運動にも言及している。

こうした圧力の結果，多くのアフリカ諸国では政治システムの民主化の必要性が認識され，移行段階での手続きとして全国規模の会議や国民投票が実施された。著者は，例外があると断りつつも，比較検討に堪えうる十分な類似性が見出せると主張し，これらの手続きについて具体的事例を紹介している。

移行段階で生じる政治状況の流動化が民主化の行方を左右するとみる著者は，民主化過程の短期的な焦点として政党（野党）の結成と選挙の実施に注目する。まず選挙実施の前提となる政党の結成について概観した後，体制変更に結びついた選挙と体制承認的なそれを多くの事例によって紹介している。著者の見解によれば，いずれのタイプの選挙も政治参加の拡大をもたらしたという。また例えばボツワナのような国について，最近の選挙だけでなく過去に遡った分析をも行うべきだと主張する。

選挙実施後の展開も国によってさまざまである。著者は，特に民主化の進展が思わしくないルワンダ，ブルンジ，レソト，ナイジェリアの状況を概観し，民主化プロセスに脅威をもたらす最大のものは軍部であるとの仮説を立てている。その上で軍政下にあったこれらの国々に比べれば，一党支配が続いてきた国々の方が民主化の進展は良好であったとの見方を示した。

将来のアフリカの政治システムにおいて民主主義が果たす役割の重要性については，これまでの経緯が物語るように予測不可能であり，「わからない」と答えるのが妥当であろうと著者は述べる。民主主義的支配の創生と定着という観点から，アフリカの民主化の展望については楽観論と悲観論に二分されるが，著者は自身のスタンスを前者とみなしている。ただし本書で展開される楽観論は，あくまでもアフリカで起こりうる事象に関する評価に基づいた，限定的かつ警戒的なそれであることを強調することも忘れない。その上で，他地域（特にラテンアメリカ）との比較の意義や民主主義以外の選択肢について論じ，経済発展やリーダーシップとの関係，外国援助や地域協力といった要素に論及した後，民主化プロセスには偶発的な要因も作用しうることを指摘して本書を結んでいる。

本書の結論は必ずしも明確ではないが，著者は前著 *Democracy in Black Africa* の結論の一節，「アフリカの民主主義の将来はばらばらで，しかも変わりうるが，しかし永続的なものである」を引用し，この見方が依然として妥当なことを示唆している。本書のタイトルでもある民主主義に向けた「新たな闘争」によって，民主主義は以前にも増してアフリカの政治課題として定着しており，その将来については慎重な楽観主義で臨むべきというのが著者のメッセージである。

（アジア経済研究所総合研究部）